
紅《べに》の痕跡

しらゆり璃桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅^{べに}の痕跡

【Nコード】

N1110M

【作者名】

しらゆり璃桜

【あらすじ】

紡ぎしは死憶の痕跡。追い求めしは儚き幻想。

相次ぐ生徒達の不可解な死。迫り来る影。瞬く景色。ちりばめられた全ての欠片を繋ぎ合わせた時、浮かび上がる答えは何なのか。

”死の記憶”を視る能力を持つ大学生、佐々木漸が大学内で起こる謎に挑む。

0：（前書き）

初めまして しらゆり璃桜と申します。

この物語は前から書きたいなあと思っていてずっと懷に温めていた（？）ものです

少しでも楽しんで読んでいただければ幸いです!!

0 :

ケース1：伊藤 彩乃

法学部法学科4年。5月27日午前7時過ぎ、大学の屋上から首を吊っているのを遺体となって発見される。

死亡推定時刻は同日午前2時頃。自宅から抜け出し大学で自殺を図ったものとみられる。

ケース2：松井 隆盛

薬学部薬学科1年。6月2日午後6時、旧校舎屋上から遺体となつて発見される。

死亡推定時刻は同日午後5時頃。首の動脈を切った跡があり、また本人の手には血の付いたナイフが握られていた事から警察は自殺と判定。

ケース3：渚 由佳里

医療生命工学部科学科3年。6月5日午後4時、大学の屋内プールにて遺体となつて発見される。死亡推定時刻は同日午後3時半過ぎ、死因は溺死。

目覚めると夜中の二時だった。

佐々木漸^{ぜん}は咄嗟^{とつさ}に自らの額に触れた。汗が滲み出ている。部屋の空気がやけに蒸し暑く感じた。

起き上がるのと同時に頭痛が走る。みぞおち辺りにも痛みを感じ、何より呼吸の仕方を忘れてしまったかのように息苦しい。

「また、か……」

漸はそう呟きたため息をついた。最近いつもこうだ。夢見が悪い。こうして夜中に目が覚めるのももう何度目だろうか。目覚めた後は決まって頭痛がした。

みぞおちが痛みだしたのもちょうど夢見が悪くなって1ヶ月くらい経ってからか。

漸はベッド横にあるライトスタンドに置いてある携帯を開いた。

メールが一通来ている。大学の友人・四宮玲^{しのみやれい}からだった。

『明日の実験ってパソコンいる？』

このメールが来た時間は23:35。携帯が鳴っていたのは何となく覚えているから、つまりその頃漸は寝落ちしてしまったことになる。

部屋の明かりも付けっ放しであった。

漸は部屋の明かりを消すと、ベッド横にあるライトを弱にしてつけた。そして再び携帯に向き直る。

玲にメールを返そうかとも思ったが、時間を考えて返すのは控えて

おいた。恐らく玲は自分からのメールの返事が帰ってこないことに耐え切れずに亜佐奈にでも答えを聞いているだろう。

漸は携帯を閉じると同時に目を瞑った。そして先程見た夢を思い返す。

妙な夢だった。風呂場　このマンションとよく似た風呂場だったが　に漸は立っていた。手にはナイフを握っている。何の感情も浮かばなかった。ただ、やらなければならない　そう思った。そして漸は、自らの首にナイフを突き刺した　。そこで目が覚めたのだ。

夢にしてはやけに現実味があつた。

何より怖いのは、最近見る夢が全て”自分が死ぬ夢”なのだ。

繰り返す死にゆく恐怖。

それは自らの存在を幾度にも渡り消されるという感覚。

漸は手足が冷えていくのを感じた。

こうして夢で一回、また一回と死にゆくたび交通事故で帰らぬ人となった両親の事を思い出す。

漸の両親が帰らぬ人となったのは漸が11歳の頃　今から9年前の事である。

高校を卒業するまでは17歳年上の従兄弟の一人暮らしの住まいに住まわせて貰っていたが、大学に入学してからは今こうして一人暮らしをはじめている。

死ぬ夢を見始めたのは一人暮らしをはじめてからちょうど3年目に突入したころ　今から二カ月前くらいからである。

夢で体験する死は全て身が凍り付くようなものばかりだ。父さんも母さんも、こんな思いをして死んでいったのか　。

そう思うと心が傷んだ。

それから暫くあれこれ考えていたが、漸は一息つくとベッドに再び横になった。

考えたって仕方がない。

きつと最近疲れているから、こんな夢を見るのだろう。また寝て朝起きれば、きつとこんな夢の事など忘れるはずだ。

明日は午後から実験もあるし　寝ておかなければ。

そして漸は再び眠りの世界に落ちていった。

2:

携帯のアラームが鳴る音で、漸は再び目覚めた。

時間は6時半。一時限目から授業がある日はこの時間に目覚めるようにしている。

頭痛はまだ少し残っていたが、息苦しさは消えていた。何より恐ろしい悪夢を見ることもなかった。

漸は起き上がると、ベッド横にある出窓のカーテンを開けた。部屋一面に光が満ちる。

梅雨時期には珍しく、清々しい朝だった。気分も自然と晴れ晴れしくなる。

今日は朝イチから研究室のゼミの日だ。ゼミといっても大したことにはやっていない。8月下旬にある資格試験の勉強会である。大学院生が有志で教えてくれるのだが、これが中々に有意義なのである。急いで支度をしようと、漸は寝室を後にした。

漸は一通りの支度を済ませると、鞆を持って玄関の扉を開いた。

時間はいつも家を出る時間よりも早かったが、早く着いたら少し大学で休んでいればいい。

マンションの部屋の鍵をしめ、漸は通路を真っ直ぐ歩きエレベータへと向う。

まだ時間も早いということもあり、エレベータはすぐに漸の住んでいる八階へと来た。案の定、誰もいない。赤い絨毯が敷いてあり、扉と対極にある壁一面が鏡になっていて小さな個室の中に入ると、漸は一階のボタンを押した。ドアが閉まり、一瞬内臓が取り残され

たような感覚がした後、エレベータは音を立てて下へと堕ちていく。一階に着くのを待ちながら、漸はふと夢の事を思い出した。あの夢は結局何なのだろう。何か意味があるのか。それともまた別の何かがあるのか。

一階に辿り着くと、漸は大理石の床のホールを抜け、マンションを出た。目の前には広い、けれど少し寂れた道路が広がり、あたり一面は漸が今出てきたマンション同様、まるで高層ビル街のように少し高級志向のマンションがそびえ立っている。

漸が通っている大学は歩いて15分位にある、最寄り駅から八駅先にある私立江南大学だ。

漸は現在その医療生命工学部臨床工学科の3年である。

漸は駅へ向かう途中、ふと建物の入り口のガラスに映る自分が目に入った。

暗めの赤い髪　　今時の若者同様、髪をワックスで盛っている。大きくすつとした目、耳にはピアスを幾つも付けている。背丈は百七十五センチくらいで、細身の体型。

よく知っているはずの自分なのに、まるで全く知らない男に感じる。最近ずつとこうだ。まるで、自分が自分でないようだった。

自己の確立とは、生きる上で最も重要な事だ。自己とはいわば木の幹みたいなもので、自分の行動の原点といえるだろう。

自分というオリジナルがあるからこそ、自分特有の、自分にしか選ぶことの出来ない「生」が全う出来る。

つまり自己の確立が成されていないという事は、自分がどう生きていけばいいのか何の為に生きているのか、それさえも解らないということだ。

そうか。

漸はそこまで考えてはつと気付いた。
つまり自分にとっての行動起源は、「佐々木漸」という男に到達する事なんだろう。

学校に着いたのは八時過ぎだった。時間帯が早いということもあり、交通機関もいつもよりも割とスムーズだったのだ。

玄関を抜け校舎内に入る。案の定人影は見当たらない。漸はこのまま空き教室でゼミが始まるまで寝ていようかとも思ったが、ふと思いついて屋上の方へと向かった。

屋上といえばここ二週間くらい前、首吊り自殺が起こった現場だ。以前は昼休みなど生徒達の休憩所として活用されていたが、自殺現場となつてからは生徒達はあえて誰も近づこうとも思わなかった。普段生徒が生活している階とは違い、屋上階に繋がる階段は、まるで人を拒むかのように、途端に埃臭くなる。蛍光灯もない薄暗い空間は、まるで別の世界に来てしまったかのようなのである。

屋上へ続く扉の窓ガラスから漏れる日の光だけが足元を照らす。

漸はその扉を開けると、俯瞰へと足を踏み入れた。

屋上は殺風景だった。

校舎自体は外装が煉瓦仕立ての、壁に蔦が生い茂る昔風の洒落た建物なのだが、屋上はコンクリートを打ち込んだだけの、何の変哲もない空間だった。

周りはフェンスが囲んであり、ちよつとやそつとでは乗り越えられそうもない。漸はフェンスの近くに寄つてみた。

ここに縄を括り付けて、フェンスを乗り越え首を吊るのはそう簡単な事ではないはずだ。

首を吊るならばもっと適任な場所は他にある。

そんなままでして空に飛び立ちたかったのか。ならば何故首を吊つた？空に飛び立ちたいなら、縄という枷は要らない。そもそも死ぬの

が目的ならば、ここからそのまま飛び降りればいい。

「屋上で」「首を吊る」ことに何か意味があるのか。それとも。

ここまで考え、漸ははっと我に返った。

「こんな事、俺が考える事じゃねえよな……」

そう呟くと、その場に座り込み、漸は空を見上げた。何もかも吸い込んでしまいそうなくらい、青い空だった。

確かに、自分という存在がとても小さな、何の力も持たない無価値なものと思い込んでしまうほど、この空は広大で深く、人の心に言葉では表しきれない衝動を生む。

そう、時には唐突的に、死や生など考える間など与えないほどに、激しい「渴望」と言う名の衝撃　この広大な空の一部に溶け込みたいと思わせるほどの、衝撃さえも。

その時だった。頭の中が、フラッシュを焚いたように光ったかと思うと、漸の眼の前に広がる景色が、まるで紙芝居をめくるかのようになりと変わっていた。

場所はこの屋上のようなのである。真夜中なのだろうか、月の光がコンクリートの床を薄暗く照らしている。

開けた扉もそのままに、ゆっくりと、真っ直ぐフェンスの方へと進んでいく。そしてフェンスのすぐ手前まで来たところで、ロープをフェンスの下へと結んだ。さらにロープの端を手にとると、自らの首へと結び付ける。何の感情もなかった。ただ、自分のしななければならぬ事だけは分かっている。

そして漸は、フェンスを乗り越え、俯瞰へと飛び出した。

目の前にまた閃光が走る。空がさっきよりも少し遠い。

気が付けば、漸はコンクリートの床に仰向けになって倒れていた。

額から汗が滴り落ちる。自分の手が、ガタガタと震えているのが分かる。

空は明るく、朝の陽射しが眩しいくらいである。

今、確かに、自分は何かを見ていた。客観的にはない。確かに自分の目線だったのだ。夢にしては、やけに鮮明な。

眠りについてるとき以外で、この恐ろしい悪夢を見たのは初めてだった。

ましてや、無理矢理夢の世界に引っ張られるかのような感覚。

息が、荒い。今こうして恐怖を感じ、息をしている自分は確かに生きている。ではさっきの自分は？さっき、あのフェンスを越え、飛び出した自分は。

漸は飛び起きた。気が付けば下のほうが騒がしい。生徒達が登校する時間になったのだろうか。漸は腕にしている時計を見る。時計の針は、8時45分を指していた。もうそんな時間になったのか。つまり、随分長い間気を失って倒れていた事になる。

漸は立ち上がった。まだ少し震えている。飛び出した感覚、堕ちる瞬間、首のロープに物凄い勢いで引き締められる激痛。全てがまだ残っている。

今まで見た中で、こんなにも感覚が残っている夢は初めてだった。

漸は深呼吸すると、校舎へと繋がる扉へと向かい、汗ばむ手で扉を開けた。

「漸、どうしたの？」

同じ研究室で友達の夏川亜佐奈がそう話し掛けてくるまで、漸は机に伏せ気味に座っていた。

ゼミまではまだ時間があるせいか教えてくれる大学院生は来ない。先輩たちが数人いるくらいだ。

季節は梅雨に差し掛かる頃、この時期はちょうど新学期にも慣れてきて、生徒達に怠惰な空気が流れ始める頃でもある。

だがこの度重なる事件により、生徒達の間には今までにない、不安とも恐怖とも取れる空気が漂っていた。

それはこの研究室でも同様で、先輩たちの顔もどこか暗く見える。漸はそんな教室を見回しつつ、ゆっくりと起き上がるとやがて目の前の娘に目を向けた。

セミロングくらいの黒髪を真っ直ぐおろした、可愛い雰囲気を持つその娘は、黒く大きい瞳で漸をじっと見ている。

同じ研究室に所属が決定し話し始め仲良くなっただが、それまでは全く話したことがなかった。今になってようやく冗談も言える仲になったが、少し前までは会話すらもそう長くは保たなかった。

亜佐奈はどちらかというと人とつるんだりはしないほうで、以前まではおとなしい子なのかと思っていたのだが、話してみると明るく、素直な性格の持ち主だった。

「どうしたって…特に何もないけど。俺何か変？」

「うん…なんか……いつもの漸と違う気がする…。気のせいかな」
漸はそう言われて今さっき自分が体験した事を思い出した。

いつもの悪夢でさえ恐怖を感じるのに、さっき体験した事はどうか考

えても異常だ。

しかし、そんな夢みたいな事を言うわけにはいかない。漸は普通に答える。

「ああ…気のせいだろ。精々違うといえ、今日は買ってきた飲み物が……」

「漸……!」

突如、自分と呼ぶ声がして漸は嫌な予感がしながらも振り替える。

そこには、雑多な教室でさえも一瞬中世ヨーロッパ王宮かと思うほどに、場違いな男が立っていた。

格好は白くパリッとしたワイシャツに黒いタイトなパンツ、少しハードなベルトにブーツというファッションだが、肩まである金色の波打つ髪に、すらっとした立ち姿は、まさに貴公子と呼ぶのに相応しいくらいの気品をかねそろえていた。

そして、男は今、眉間に皺を寄せて漸の事をじっと見ている。

「……………玲」

漸はようやく口を開いた。

そのようすを見て、さらにその男 四宮玲は眉間の皺を深める。

「何で今日はいつもの電車に乗らなかったんだい」

そう話す玲の声は少し怒りを含んでいるように聞こえる。

「何でって…案外早く電車に乗れちゃったからだよ」

「いつも僕と同じ電車の同じ車両に乗って大学まで行くのが日課じゃないかっ!」

そう言つて玲はぶいっとそっぽを向いた。

黙っていればかなりの色男だろうに、これでは気品も台無しだ。

「玲は漸のこと大好きだもんね」

亜佐奈が笑いながら突っ込む。

「なっ…何を言ってるんだ亜佐奈!僕は別に漸が好きとかそういう

のではなくてだね……」

「漸から昨日の夜メールの返信が返ってこないからって心配して私にわざわざ電話までしてきたくせに」

そういえば玲からメールが来ていたんだった。

メールを見た時間も時間という事もあり、どうせ亜佐奈あたりから聞くだろうと返事を返さなかった事をすっかり失念していた。

「寝ていてメール返すの忘れてた。ごめんな」

「玲ったら１１時頃にいきなり電話してきてねー。」漸から返事がない”って泣きながら言ってきたんだから」

「泣いてなんかいなかっただろっ！」

「かなり心配はしてたくせに」

「それは今日パソコン使うか聞きたかったのに漸から返事がなかったから、パソコン準備しなきゃいけないのかどうなのか困ってたからだっ！この僕が漸の心配なんかするわけないだろっ！」「ふうん…そうなんだあ」

そんな二人の会話を聞きつつも、俺は先輩たちの方へと視線を移した。

３年が研究室に所属されてからまだ１ヶ月も経っていない。この研究室に所属されているのは漸、玲、亜佐奈の三人だけである。

この月曜一時限目のゼミもつい二週目前から始まった事であり、その為先輩たちとはほぼ話したことはなかった。

今いる先輩たちは三人。

話したことが余らないせいで詳しい人となりは知らない。名前をやっと覚えてくくらいだ。

今時らしく肩にかかる程度のボブカットを金色に染めているのは烏川未来子。シヨッキングピンクの何やら色々デコレーションが施されているＴシャツにスキニージーンズ、右が黄色、左がオレンジの左右色が違うスニーカーがまた妙に似合っていて、彼女の明るい性

格を物語っている。

黒く少しクセのある髪を横分けにし、褐色色の前あきシャツに細身のブローケンジーンズ、黒いブーツという服装の男は龍野花郎^{たつのなろう}。程よくついた筋肉に、少し日に焼けた肌のせいも、小柄ながら全く小柄に見えない。確かテニスが上手で小学生向けのテニススクールで講師をしていると言っていた気がする。

カチューシャで前髪をとめている紅茶色の髪の男は石本宗明^{いしもとむねあき}。灰色のパーカーに大きめのジーンズ、オレンジのクロックスというどちらかといえばラフな服装である彼は花郎とは非対称に白い肌で、その白に妙に映える髪色と同じ紅茶色の瞳が不思議と印象的である。三人はやはり固まって話している。普段つるむ程ではないのかもしれないが、きつと三人とも仲はいいのだろう。

漸がそうして儚と4年生らを見てみると、宗明がふいにこちらを見た。

やばい。見てんの気付かれたのか。

瞬時に眼が合う。

紅茶色の深い眼が、漸を捉えた。

その一瞬。

どうしてだろう。

漸の脳裏に、今朝見たあの映像　縄で首をくくり、俯瞰へと飛び降りるあの感覚が、一瞬のうちに戻ってきた。背筋が凍ったように、寒気が走った。

そして。

初めて体験する感覚が漸の脳内に、無理矢理押し入るように入り込んでくる。

空気が

空間が

自分を取り巻く全てのものが

凍り付き、砕け散っていく感覚。

自分の軀さえも心さえも散り逝く恐怖。

そして、目の前が瞬時暗くなった。

ふいに、永遠とも思えるような一瞬が終わった。宗明が微かに笑っているのが分かった。

気が付けば漸の中から恐怖が消えてなくなっていた。屋上にいた時とは違う。あの時は恐怖で震えが止まらなかったのに、今は単なる記憶として平然と捉えている自分がいる。

「……………」

「ゼーんっ！どうしたのっ」

亜佐奈が漸の髪を目の前で手をひらひらさせる。

漸ははっと我に返った。玲も心配そうにこちらを見ていた。

気が付けば、宗明も普通に未来子たちと話している。

「いや、何でもねえけど……」

「そう？ならいいんだけど……あ、そういえば漸、今日飲み物ミルクティーじゃないじゃんっ」

そういつて亜佐奈が机の上に置いてあるペットボトルを指差す。

いつもはミルクティーを買うのだが、今日は気分でジャスミンティーにしてみたのだ。

「何か気分だな。こうやって飲んでみると結構ジャスミンティーも上手いかも」

「…確かに漸はミルクティーっていうよりかはジャスミンティーだね」

玲がジャスミンティーのペットボトルを手にとって見ながら言った。
「俺っぽい…?」

「うん。何か漸ってジャスミンティーっぽい」

一体どこがなんだろう。

それを聞こうと漸が口を開こうとしたとき、教室の扉がガチャンと音をたてて開いた。

「皆さん、ご機嫌よう」

そういつて入ってきたのはスーツ姿の女性だった。院生の杉浦美奈子だ。彼女が有志でゼミの講師をしてくれている。

年は二十代後半といったところだろうか。長い髪を横の方で一つにまとめている。

3年も4年も、その姿を見て席に着く。「遅れてごめんなさい。じやあ早速始めるわ」

そういつて杉浦はプリントを配り始める。

そしてゼミが厳かに始まった。

さっきのは何だったんだ？

漸は杉浦の話を聞きながらも、頭の奥底でその疑問をかき消すことは出来なかった。

一時間半のゼミが終わった後、杉浦が最初に出ていくと、生徒たちは一斉に立ち上がった。

「じゃ…みきちー、あっきー。俺先行くわ。中谷先生に用あるし」

「後でね花郎ー！」

「またなー」

未来子と宗明が花郎にそう言い手を振る。

花郎は漸たちにふいに顔を向けると手をひらひらと振った。

「漸くんは玲くん、亜佐奈ちゃんもまたなー」

突然の事だったので三人ともすぐ反応出来ない。

「あ…は、はいっ！さよならですっ」

最初に反応したのは亜佐奈だった。それに続いて玲も頭を下げる。

「また…また今度！」

漸も咄嗟に頭を下げた。

「お疲れ様でした！…龍野さん」

確か名字龍野でいいんだよね…？

そんな漸の心配をよそに花郎はカラカラと笑いながら言った。

「名字じゃなくて…花郎でいいよ！じゃあねー！」

「花郎さんいい人だったね」

玲がそう呟く。

ゼミをやった教室を出、二時限目の薬理学の教室へ向かうため、三人は桔梗棟ききようとうへ向かっていた。

甲南大学は全部で5つの棟により構成されており、東西南北の順に桔梗棟、紫苑棟しおん、躑躅棟つづじ、撫子棟なでしこがあり、中央に棘薔薇棟いばらばながある。

甲南大学は敷地が異常に広いため棟を挟む移動はとてつもなく大変だが、三人が今いたのが棘薔薇棟で、棘薔薇棟はどの棟にも繋がっ

ているため移動はまだ楽であった。

「まさかあんなに花郎さんがフレンドリーだったとは知らなかったねっ。それに私たちの名前まで覚えててくれたなんて……」

亜佐奈が満面の笑みでそう言う。

確かに花郎さんはいい人だったな。

だが漸には今花郎以上に気になっている事があった。宗明のことだ。先程あんな風に不可解な事が起こったばかりだ。気にならないはずもなかった。

漸はさり気なく二人に聞いてみることにした。

「あのさ、石本さんってどんな人なんだろ？」

「石本さん？石本……宗明さんだっけ。あのカチューシャの人だよね？」

亜佐奈が言った。続いて玲も言う。

「石本さんって確かうちの大学の寮に住んでるって聞いたよ」

「へえ……」

甲南大学には一応寮があるが漸のように一人暮らししてしまったほうが意外にも安くすむため入っている生徒はそこまでいない。

漸はまだ建物自体は見たことがないが、確かその辺の高級住宅街に建っているマンションよりも高級だとか。

「あと……」

玲が声を落として言った。

「石本さんって……伊藤彩乃さんと遠い親戚らしいよ」

漸の頭に、一瞬痛みが走った。

「えっ！あの屋上から首吊り自殺した……？」

「亜佐奈！声が大きいよ」

玲にたしなめられ亜佐奈はまわりを見た。幸いにして誰にも聞かれていなかったようだ。

一連の自殺については、今大学内では暗黙の了解で口にすることはタブーとされていた。

「本当か、玲？」

漸は声を落として聞いた。

「ああ。警察の事情聴取にも呼ばれたみたいだしね」

「…一体お前それどこから聞いてくるんだ。そんなの大学の関係者しか知らないだろ？」

漸は半ば感心しつつもあきれ顔で聞く。

すると、玲は得意の王子スマイルでウインクしながら言った。

「僕の一番上の兄貴、この大学の教授だから」

薬理学の担当であり漸らの所属する研究室の教授、高崎藤十郎は他の教員と比べても、かなり謎めいた人物であった。

「みんな、この前やったテストは持ってきたかな？」

授業中は白衣を着ており……というか大学内で白衣以外着ているのを誰も見たことがないが、その下にはまたまた教員らしく細身のスーツを着こなしている。

それだけなら不思議さなど何処にもないが、大学教授にしては異質で、髪は茶色くボサボサで肩の下まであり、瞳は何故か緑、これだけでも十分奇怪だが、一番不思議なのが顔で無精髭を少し生やしているのだが、これが二十代にも四十代にも見えるといった具合である。

背は普通に見ると際立って高くは見えないのだが、百八十三センチある玲と比べても差がかなり解るくらいに背が高いので、もしかしたら百九十センチくらいあるのかもしれない。

そして高崎藤十郎の謎はさらに続き、プライベートに何をしているのか、どの辺りに住んでいるのかなど、誰も検討もつかないというのだ。

「じゃあ今日はテストの解説をしよう。その後小テスト配って、出した人から解散」

そう言つて高崎は黒板に、以外と綺麗でしっかりした字でテスト問題を書き始めた。

ここ、薬理実験室はそういつた意味で、高崎そのものを表すようだと漸は以前思つたことがある。

一見するとただの、所謂「実験室」だが、所々明らかに場違いなものが置いてある。

アラスカの木の彫刻のようなものや古い掛け時計　しかも針は動かない　や、抽象画なのか何か書いてあるか分からない不気

味な絵画など、薬品などに紛れてこういった怪しいものが飾られているのだ。

しかも実際誰も高崎にこのような飾りについて突っ込まないから不思議である。

高崎自身は決して話し掛けずらいとかそういった雰囲気は全くなく、むしろ話すとかかなり気さくな人物なのだが、生徒達と交流があるとかそういった雰囲気もまたない。

一体彼は何者なのか。いくら考えても漸には解らなかった。

「うーん……じゃあ四宮くん」

玲の名前が呼ばれ、漸もついはいとす。

玲はかなり気まずそうにはい、と返事をする、その場　長机の漸の真向かいの席　で起立した。

「四宮くん。この問題だけど、不眠症の定義はなんだったわけ？」

「……………不眠症の、定義……………」

玲はかなり困っているようだ。それもそのはず、玲は本人曰く薬理学が壊滅的に苦手らしく、今回のテストも「相変わらずの点数」だったらしい。

ならば何故臨床薬理専門の高崎研に入ったのかという話にもなるが、それでも医療生命工学部の中で三百人中五十四位を総合で取れたのだから実際はそんなに悪い点数ではないのだろう。

「不眠症状が、週三回、1ヶ月以上続いた状態……………」

「そう！正解だよ。じゃあ不眠症に用いられる主な薬剤は？」

「ええ……………」

そんな感じで高崎と玲の戦いが暫く続いた。全て答え終わったあとには、玲はかなり疲れた顔をしていた。

「お疲れさん、四宮くん」

何の悪意もないにこやかな笑みで高崎はそう言った。悪怯れないその態度が飾りなのか真実なのかは当然知る由もない。

その後何人かがランダムに当てられたが、答えられるものはごく少

数で、ここにいる生徒全員が高崎の作る薬理学のテストの難易さを知った。

現に薬理学のテストの平均点は他教科に比べて著しく低い。赤点のものすら、何人かいた。

「まあ生徒諸君、これに挫けず頑張り給え」

そう言つて高崎は各テーブル毎にB5の紙を配った。最初に言つていた小テストだろう。

問題をみると、先程授業でやった問題がそっくりそのまま出題されていた。玲も安堵の顔を浮かべている。

こういう時の生徒達の行動は速い。さつさと問題を解き教壇へ提出すると、皆次々と教室を後にした。

漸、亜佐奈、玲も他の生徒同様素早く終わらせると、教壇へ提出しにいった。

亜佐奈が二人分まとめて出し、教室を出ようとする。

「あ、佐々木くん」

漸が振り替える。そこにはやはり悪怯れない表情の、高崎教員の姿があつた。

「…何ですか？」

漸が聞く。

「君、今回の薬理のテスト学年トップだったよ」

ああ、と漸は答えた。

どう反応していいのかわからない。

薬理学でトップをとることは確かに名誉だが、それが呼び止めた目的とも思えない。

すると高崎は漸の額に右手の人差し指を当て。

「そんな君には、放課後この僕の、この僕のだよ？手伝いをするという名誉極まりない権利を与えよう」

その声、その言い方全てが玲そのものだった。

刹那、亜佐奈が吹いた。漸もいけないと思いつつ、すこし笑いが込み上げてきてしまう。

玲だけが何がおもしろいのか分からない、といった顔で、複雑そうに亜佐奈と漸を見比べている。

高崎も自身の物まねに笑いながら言葉を続ける。

「というわけで、いいかな？場所は薬理準備室で」

「いいですよ」

どうせ家に帰るのが遅くなっても文句を言う者は誰もいない。

亜佐奈が、「私も手伝いましょうか」と言ったが、また今度お願いするよと言って彼は薬理実験室と繋がっている、準備室へと姿を消した。

気が付けば、誰も実験室にはいなくなっていた。

「やつと昼休みだね。情報室は飲食禁止だし…空き教室へでも行くか。」

先程輪に加われなかった事で少し不満そうな玲が言う。

漸たちは次の実験がある紫苑棟へ向かって歩きだした。とりあえずそこで空き教室を探すというのがいつものパターンだった。

「そうだね。お昼のあとは実験だもんねっ」

亜佐奈は先程の高崎のネタで完璧に上機嫌である。

「嫌だ。この僕が、よりにもよってプログラミングなどスマートじゃないものを」

「玲パソコン苦手そうだもんね」

「漸！な、な、なにを言っているのかな？この僕がまさか苦手なものがあるはずがないじゃないか！？」

「そーかい」

「漸…さては疑ってるね？全く…君は僕という人間がまだ理解出来ていないようだね。」

「んな事はねえよ。理解してるさ。入学当初からつるんでんだぞ」

「いーや！理解してないね！亜佐奈もそうだけど、全く君たちは僕のパーフェクトさを未だに理解出来てないようだ」

「分かった！分かったよっ！もう玲がパーフェクトなのは分かったからっ！行こう漸っ」

そう言つて亜佐奈は漸の腕を掴んで引つ張った。

「ああっ！待て亜佐奈！」

時間は12時15分。太陽の光が窓から、真っ直ぐ差し込み線を描いている。

蒸し暑い六月の気候さえ忘れてしまえるほど、流れる風が清々しく感じた。

そうして三人でとりとめのない話をして廊下を歩いている途中、亜佐奈が廊下で急に立ち止まった。

既に紫苑棟の中にいたが、空き教室を探している途中である。

「……………あ」

それに気付き、漸と玲も立ち止まる。

「どうした？」

振り向きながら、漸が問う。昼間だと言うのに、気が付けば何故か異様に廊下が暗い。普通なら溢れかえるほどいるはずの生徒の姿が、まるでこの空間から忘れ去られたように、なかった。

亜佐奈はまるで蠅人形のようなだった。顔は青白く、なのに唇は紅を垂らしたかのように朱い。

先程まで笑いながら談笑していた彼女が、一瞬にしていなくなっていた。

姿形は同じだが全く別の存在。

漸は異様な空気を痛いほど感じながらも亜佐奈を見つめそう感じた。

まばたきもせず、彼女は暫くその場で固まっていたが、やがて静かに口を開いた。

「……………大変。」

「何がだい？」

玲が怪訝そうに言う。玲もこの異様な空気に気付いたようで、辺りを伺いながら、その場に立っている。

亜佐奈はこちらを見ていない。眼は虚ろで漸と玲の頭上のあたりを、^{ぼう}儚と見ている。

「……………行かなくちゃ。」

二人は顔を見合わせた。

「…何処へ？」

漸はそう問い、拳を握りしめた。自分の掌が妙に汗ばんでいるのに気付く。

おかしい。先程まで高らかに笑っていた亜佐奈の様子も勿論のこと、この空間全てが、時間そのものから取り残されているような、違和感が襲う。自分の内臓から何かが込み上げてくるのを感じながらも、漸は自分の足に力を込めた。

この感覚。あの時の感覚に似ている。

あの時　　そう。

石本さんの眼を視たときの、あの感覚に。

「亜佐奈」

まだ痺れたような感覚が残る足を無理矢理動かし、亜佐奈のほうへと向かう。

すると、亜佐奈はまるで漸から逃げるように、一步一步、後退りしていく。

「亜佐奈」

「忘れ物、行かなくちゃ　　取りに。行かなくちゃ」

そして亜佐奈は駆け出した。彼女の足音だけが、やけに虚しく響く。漸は手をのばしたが、何故か彼女を追い掛けることは出来なかった。

「漸　今の亜佐奈の様子　……………」

やっと動けるようになった玲が恐る恐る、声を出す。

「ああ……………何かに……………憑かれていたようない…」

そうして漸は玲に駆け寄ると、玲の肩を軽く叩いた。

「玲、行くぞ」

「え……………あ、亜佐奈は…？」

「今はどうすることも出来ないだろ。」

二人は暗い廊下を歩きだした。誰もいない。互いの足音だけが、響く。

暫くすると、少し薄明かりが廊下の壁から漏れるのが見えた。階段である。

「空き教室は、四階だよな」

不安を押し殺そうとしてか、玲が取り留めもないことを口走る。いつもの玲には、考えられないことだった。

「ああ」

漸はそれしか答えない。いや、答えることが出来ないのだ。

そう、次は実験だから、空き教室を探すんだ。空き教室は四階の

……………

二人はそのまま階段の前に来る。

そのとき、漸の脳内に衝撃が走った。隣で玲が息を呑むのも聞こえる。

「漸　ここは」

「玲　」

ここは、何階だ？

普通なら地面に印してあるはずの階番号がない。

漸は思考を巡らせた。

さっきまで授業をやっていたのは　桔梗棟？いや、それ以前に

何の授業だった？俺達は何処にいて何処に向かっていたのか。分からない。何故？思い出そうとすると、その部分の記憶のみ墨で塗ったように、思い出せない。

隣を見ると、玲も混乱しているようだった。

「玲　俺達は……」

玲は何も答えない。

漸は眼を閉じた。頭がくらくらする。熱を帯びたように、何も考えられなかった。自分の心臓の音が、やけに高まって聞こえる。

刹那。

「漸」

開眼し隣を見ると玲が床に膝をついていた。

息遣いは荒く、上へと続く階段を眼を見開きながら見ている。

「玲、どうした」

玲は答えない。ただ漸のほうへと首だけ向けると、上階段を指差した。漸は指差した方向を見る。

始め、漸はそれが何か分からなかった。

朱、朱、朱、朱　。

あの朱い液体は何だ。絵の具でも零したかのような、朱い、大量のモノ　。

ソレは、更に上の階から流れていた。漸は視線をソレへと移していく。

丁度階段の壁の死界になって見えるか見えないかギリギリのところ
で、漸は眼を見開いた。

全身から汗が一気に出る。

震えが止まらない。寒気が襲う。

あれはなんだ。あれは

突き出ている、一本の腕。

そうだ、あれは腕だ。腕、腕、腕。

そして腕に、まるで床に固定するように刺さっている、あれは杭。

しかし流れている血は腕からだけではなかった。

ふいに何かが落ちる鈍い音がしたかと思うと、それは姿を現した。

首をざつくりと切られた

自分たちと同じくらいの年であろう、男の姿。

死。自分が今見ているものは、死。

そして、漸の脳内にまた、フラッシュをたたいたかのように攻撃的な光が満ちた。

夢としている。

でもやるべきコトは解る。行かなければ。早く、早く。

屋上にある梯子を伝い隣の棟に渡る。

渡った先の棟は、今漸たちがいるであろう棟。

屋上から校舎内へと入る。

そして、ポケットにいれてあった美術用の杭を右手に持つと、自らの左手へと打ち込んだ。

痛い。だが、恐怖はない。

これで終わる。オウル。

そして持っていたナイフで自らの首を、ゆつくりと、切っていった。

また攻撃的な光が襲う。
意識が遠退く中、漸は玲の自分と呼ぶ叫びを聞いた。

堕ちていく。霄。碧。
。 鳴呼、今俺は灰になる。

これが死か。死。

暫く堕ちていくまま、朽ちていくまま身を任せていると、突然全身を何かに捕まれたような衝撃が走り、重力に反するように、一気に持ち上げられた感覚がした。
どンドン、自分が上に上がっていくのがわかる。

『……ん………漸……』

遠いのか近いのか分からないところから声が聞こえる。

『漸………』

この声は、誰だ？
俺はまだ堕ちていたい。堕ちて。
。

『君はまだ、あちら側にいつてはいけない』

天井が見えた。

さつきまで見ていたものとは違う、綺麗な白い天井。

「おつ、やつと戻ったか」

横から声が聞こえる。

この声は。

天井だけ見えていた視界に、ふいによく知る顔が現れた。

「佐々木少年、危なかったねえ。僕が偶然近くを通っていなければ、君は今頃空気くんだったところだったよ」

その男 高崎教授は楽しそうにそう言った。

「……………はあ」

今の発言に突っ込みたいところは沢山あったが、まだ頭が完璧に目醒めていないのか、言葉が上手く出てこなかった。

「ここ、は……………」

「ん？ここは僕の隠れ家。保健室に運ばれると何かと面倒だし、四宮少年と協力して何とかここまで運んだのさ」

意外と軽くて楽だったよ、と高崎は付け足した。

四宮。玲のことか。

その名前を思い出した瞬間、漸の脳裏にあの時起こったことが次々と思い起こされた。夢とした頭が一気に現実に戻ってくる。と同時に、嘔吐したくなるほどの恐怖も舞い戻ってきた。

「っ！し、した、死体……………階段から、した、い……………」

文脈が全く繋がらない。しかし高崎は今ので通じたのか、左手で静かに漸の言を制した。

「大丈夫。あの場に死体は無かったんだ」

「……………え？で、でも、俺と玲は、確かに…」

この眼で見たのに。

高崎は完璧に混乱している漸の額に左手で触れると、驚く位優しく微笑んだ。

「なかった、というのは可笑しいかな。確かにあの場には、頸動脈を切って死んだものがある。だが、それは一週間前、六月二日の話だ」

意味が分からなかった。

高崎は話を続ける。

「君と玲が共通して見たものに関しては、まあ、恐らく幻覚

催眠術の類、だろうね」

「催眠、術……………」

随分ぶつ飛んだ話のため漸はつい聞き返さざるを得なかった。

「そ。詳しい事はまだ情報が足り無さすぎて分からないけど、君達はその時、一種の催眠状態に陥っていた……………ま、催眠って言葉だと語弊があるかな。簡単に説明すると、催眠に近いって事」

催眠術などテレビの中など架空のモノでしかないと思っていた漸にとっては、現実味がなさすぎて反って受け入れるしか出来なかった。

「けど…先生」

漸はふと頭に浮かんだ謎を口にした。

「何で俺達が催眠状態になってたっていうのが分かったんですか？」

「ああ…それ？」

高崎は漸の額から手を離れた。

「……………佐々木くん、明日って学校半日だろ？」

突然脈絡のない話をされて一瞬戸惑ったが、明日が一部の教諭達の会議で午前中のみ授業だという事を朝のホームルームで聞いたことを思い出し頷いた。

「じゃあ授業終わったら、また此处に来てくれないかな。その時に、色々と話そうか」

此処：そういえば此処は何処なのだろうか。高崎は隠れ家と言っていたが、此処は。

漸は起き上がり周りを見回した。起き上がった時点で、自分が黒い革のソファに寝ていたことによりやく気付く。

周りは色々なものでごった返していた。何に使うのかよく分からないものも多かったが、棚には薬品らしき瓶が沢山あった。

一瞬薬理準備室かと思ったが、そこはこんなスペースではなかった筈だ。生活感：というのも可笑しいが、此処は薬理実験室などよりも、さらに高崎らしさで溢れていた。

取り敢えず起き上がって上履きを履いてはみたものの、どこが入り口なのかも分からない。

「ああ、忘れてた。そうだよ。分からないよね。此処はさほら」

そう言いながら高崎は飾られていた高さ三メートルはあるであろう絵画の右側を押した。

するとそれは回転式ドアさながらに動き、ちょうど45度回ったところで高崎は押す手を止めた。

向こう側の景色が見える。長机、水道、黒板、ガスバーナー：そこは、よく知った。現に今日も授業を受けていた薬理実験室であった。

「隠し扉：」

「そういう事」

二人で開いた絵画の扉。床から十センチは離れているため跨がなければならぬ。床から十センチは離れているため跨がなければならぬ。高崎はそのまま扉の回転を元に戻した。

こちら側からその扉はさつきとは違う絵画になっている。

この絵画が広い実験室の、後ろ側の壁に面していて、他の装飾もあつてかあまり注意を払わなかったというのもあるが、今までこの教室で何回も授業を受けてきたのに、この絵にこんな仕掛けがしてあるとは漸は夢にも思わなかった。

「人が注意を必要以上に払わないように、周りの配色とか、物の配置とか…まあ色々視覚のトラップは張ってるからね。四宮くんも随分驚いてた」

そうだ、玲。先程玲の事を思い出したのに、一連の話ですっかり流れてしまった。

「先生、四宮は…」

「先に帰らせた。落ち着かせはしたけど、彼も精神的な休養が必要だったからね。佐々木くんが暫く目醒めないのも分かってたしね」それを聞いて漸は自分の腕時計を見た。そういえば、随分と周りが暗い気がする。

「五時……」

まさか。ということは自分は実質六時間くらいもの間意識を失っていたのか。

「催眠のせいもあるけど、精神にかなり負荷がかかったしね。これくらいは当然だよ。現に四宮くんも佐々木くんを運び終わった後、暫く眼を開けなかったね」

高崎はそう言うのと自身の腕時計を見、その後漸に向き直り微笑みを浮かべた。

「佐々木くんは実家暮らし？」

「またもや突然脈絡のない質問。どうやらこの高崎藤十郎という男は、不意打ちが好きらしい。」

「いや、一人暮らしです」

「へえ…そっか」

そこで何故が高崎は黙って何かを考えはじめた。

本当にこの男は、何を考えているのか分からない。暫くすると、高崎が顔を上げてこっちへ微笑んだ。

「いや、ごめん。こっちの話…大丈夫？一人で家帰れそう？」

「あ…はい。体調も良くなったんで…帰れます」

そっか、と言うと高崎は白衣のポケットに手をつ込み、何かを掴むとそちら側の手をポケットから出して漸に差し出した。

「手、出して」

言われるがままに手を出す。すると高崎は差し出した拳をスツと解いた。

「これは…」

それは、透明の袋に包まれた小さな黄色い飴玉だった。

「レモン味だよ。美味しいから、今舐めて帰りなよ」

糖分は脳にもいいしね、と言いながら自身も赤い飴を袋から出す。漸も少し抵抗はあったものの、袋を破り、飴を取り出すと口に入れた。口のなかに甘味が溢れだす。

「…じゃあ、俺そろそろ帰ります。飴、有難うございました。」

「おう。気を付けてな」

高崎は手をひらひらと振った。それに軽く会釈をして、漸は廊下へと続く扉へと向かう。

そしてちょうど実験室から出るといふとき、後ろから声がした。

「あ、そうそう。今日は寄り道しないこと。こういう日は、さっさと家帰ってメシ食って寝るのが一番」

5 :

帰りの電車に乗っている途中、漸の脳内は先程高崎が話した事で溢れかえっていた。

信じてないわけではない。けれど余りにも現実味が無さすぎる話だ。そう考えはじめると次々と疑問点は出てくる。

あの一連の事自体が「催眠」による幻覚なのだとしたら、一体誰がいつ、どんな目的があって自分達を催眠にかけたのか。

そしてあの、脳裏に突如浮かんできた映像。あれは一体何だったのか。朝屋上で見た映像と、昼間階段で見た映像。飛び降りと殺傷。まるで自分の行った行動かのように鮮明な、あの惨たらしい映像。それに

少し感覚が違ったとはいえ、宗明の眼を視たときのあの感覚。そして亜佐奈の異常な態度を視たときの感覚。あれは一体何を表すのだろうか？

『次は 北神宮寺 北神宮寺』

最寄り駅を知らせる電車のアナウンスが漸の思考を遮た。

儚としながら電車を降り、人の流れに身を任せながら階段を登り、改札口まで出る。

この季節だというのに、空はもう真っ暗だった。

漸はふうとため息をつく、人の行き来が激しい繁華街の方とは反対側に歩き始めた。

こちら側は一気に人影が減り、気が付くと周りに自分一人しかない。

街灯を頼りに歩き続ける。

今朝見た映像。

そして先程見た映像。

共通するのは、どちらも人の死。

一体どうなっている。

これも「催眠」とやらなのか。だとしたら玲も同じモノを視ているのか？

妙に肌寒さを感じた。

心なしか風が強い。

胸の内に何とも云えぬ違和感を感じながらも、住んでいるマンションが見えると、少し安心感を覚えた。

この十字路を右に曲がれば、あとはもう数歩歩くだけでいい。

信号が赤く点滅している。

漸の視界にその光が入ってきたのと同時に、その隣に立つ普段は気にならないはずの電柱にも自然と目がいった。

曲り角に立つその電柱の根本にあるのは、塵で少し汚れた花瓶に刺さる、淡いピンクの花、熊の人形、そして、写真立て。

漸は無意識のうちに電柱に近付き、写真立てに手を伸ばしていた。そこにはまだ四歳ほどの、幼い少女が、笑う姿があった。

閃光。

道路にボールが転がる。

取りに行かなきゃ。

空気を割るような、クラッシュ音とブレーキ音が響く。
ボールを取り、横を見ると、目の前に、何かが迫って

誰かの叫びが聞こえる。

考える余裕すら与えられることもなく、目の前が、真っ暗になった。

自らが写真立てを落とした音で、漸ははっと我に返った。

今は、また　　。

引かれた。俺は今、車に　　。

だが過去二回体験した時とは違った。実際体験したようなりアリテイ感がそこまで無く、悪夢を見た後のような感覚。宗明の時の後味と少し似ていたかもしれない。

だがそれでも、あの時とは違い、じわじわと腹の底から上がってくる恐怖は、決して過去の記憶として認識するなど到底出来そうもなかった　　。

死　　。あれが、死。

漸は自分でも気付かない内に、その場にしゃがみこみ、声にならない声で、ただひたすらに、叫んだ　　。

それからどうやって家に着いたのか、漸はよく覚えていなかった。意識が完全にはつきり戻ったのは目覚ましのアラーム音が鳴ったときで、それまでのようにして今に至ったのが、いまいちはずきりしない。

状況を考えるに、どうやら昨日は帰ってきてから、制服のままベッドに倒れこみ、そのまま寝てしまったと考えるのが妥当か。

「朝」

何もする気が起きなかったが、取り敢えずシャワールームへ行きシャワーを浴びる。

その後何とか支度を済ませると、フラフラと家を出た。勿論時間は早い。だが、そんなことを構っている余裕は今の漸にはなかった。

学校に着くと、漸は何も考えず、薬理実験室へ向かった。

一瞬鍵が掛かっているかと思っただが、意外にも扉はすんなりと開いた。

絵画の扉へ駆け寄り、手を掛ける。

こちらにも鍵は掛かっていなく、くるりと静かに開いた。

漸は何も言わず、中に足を踏み入れた。

「来ると思つてたよ、漸」

昨日漸が横になっていたソファの上には、今高崎が脚を組んで座っている。

「その様子だと、昨日の帰りも視たんだろう？」死痕」を」

高崎は目の前に立つ漸を見上げながら言った。

「シコン……？」

「そう、死痕。

漸、人間はな。そう簡単には消えてなくなるんだ。

肉体としての死だけを言うならそれこそ一瞬で消えてしまえるが、存在としての死はそう簡単には迎えられない。

誰かがその人間の存在を覚えている限り、その人間は”記憶”として生き続けるんだ。

誰か、というのは生物に限った事ではない。建物や道路、空、水など、全てに記憶は刻まれる。そういったように、生命ではなく、景色に刻まれる人の記憶を死憶という。」

「つまり、人は死を迎えて肉体としての実像は無くなっても、”記憶”として存在は残っている……」

そういう事、と高崎は頷くと白衣の胸ポケットから煙草のケースとライターを取り出して、ケースから一本取出し火を点けた。

「他人の記憶が見えないように、本来なら景色に残る死の記憶は人間には見えない。当たり前だけどね。」

だから通常の人間が見ることの出来る”死”は、肉体死までだ。自分の中に残る記憶を思い出す事は出来るけど、人の記憶なんて曖昧な蜃気楼みたいなもんだから、実際見ているとは言い難い。――確かにそのとおりだ。死における過程の捉え方は人それぞれで、故に死体という確固たる結果がそこに存在しているという事だけですか、人間が”死”を理解する事は出来ない。けれど。

漸はあの映像を再び思い出す。

あのようなものを理解する必要があるのか。

そんな漸の考えを知ってか知らずか、高崎はその後暫く黙って煙草を吸っていたが、やがて灰皿で火を揉み消すとソファから立ち上がり、窓を背にして寄りかかった。

逆光のせいで、高崎の顔はよく見えない。

「…漸、死痕を視るという事。視痕の能力は、人が辿った軌跡の最期を、自分の中に取り込む事が出来るという事だ。」

「……………」

「具体的にいうならば、君の能力。 ”視痕” は、物や人に残留した何者かの最期を”視る”事が出来るという事だ。死んだ者そのものになって”視る”事すら出来、結果その者がその時感じたこと、思い巡らせた事。果ては人生までも”視る”事が出来る。」

直接言われなくても、漸はこの一言が、漸が昨日見た映像が催眠などではなく、自分自身が勝手に見たものだ、と、異質なのだと、そう伝えていることを悟った。

「……………何故、解った。俺が視たモノが。人の、人の……………」
言葉を繋げる事は出来なかった。手が震えている。

「それは、俺も能力者だから、ね。君同様」

漸は震えている手から目を離し、顔を上げた。

「ああ、勿論君とは違う能力だよ。俺の能力は、”詠読”だ。例えば昨日みたいに、誰かが君たちに”催眠”の能力を発動させたとして。そうしたら君達には必ず、”催眠”という能力の痕跡が残ってるわけだ。被害者だけじゃなくて、能力を発動させた場所とかにもその痕跡が残ってるから、そういうのを”読”める。

あともう一つの”詠”むは　　まあそのうち話すよ」

そう言つて高崎は手をひらひらとさせた。相変わらず、その表情は読めない。

「…今まで」

気が付けば漸は口を開いていた。

高崎は黙って聞いている。

「今までずっと、こんなものが視えた事は無かった。なのに昨日、朝学校に行つて屋上に上がったら頭ん中がフラッシュ焚いたみたいになって…。

気が付いたら俺は飛び降りようとしてた。縄をフェンスと自分の首に括り付けて、それで…」

「…学校の、屋上か」

「その次は紫苑棟だ。」

それで終わりかと思つたら、今度は家のマンションの近くで視た。

こんなもの…こんなもの、視えなくて済むなら、そのほうがマシだ…！！」

漸はそう言つてしゃがみこみ、頭を抱えた。

高崎は何も言わなかったが、やがて窓の外の景色を眺めながら、ぽつりぽつりと語り始めた。

「恐らく視えはじめた原因は、”催眠”の能力に触れたからだろう。”催眠”にかかったせいで漸の中に眠つてた”視痕”の能力が覚醒された。そして身体が自身の”視痕”の能力の負荷に耐え切れず、結果視た後に気絶する。その繰り返し。ほうっっておけば精神にも影

響を及ぼす。」

「……………この能力を棄てる事は？」

「無理だな。目醒めてしまった以上、どうするコトも出来ない」

「なら……………っ！」

どうしたらいい。

今見える道は、何処に行こうが泥沼だ。

漸は絶望を隠すことは出来なかった。

高崎はそんな漸をその透き通るような緑色の瞳で見つめ。

そして静かに言った。

「簡単だよ。漸、君の能力を俺に貸せ」

「……………貸、す？」

「そうだ。俺は君の精神状態を、君が”視痕”を使っても正常レベルを保てるようにしてやる。

その代わり、俺が頼む依頼をその能力を使って解決してほしい」
依頼？

何の事だろうか。

「漸、この世界にはね」

漸が理解出来ていないのを察したのか、高崎は口元に笑みを浮かべながら言う。

「漸や俺みたいに、人とは違う特殊能力を持った人間が様々な場所にいるんだ。

彼らは自らの特殊能力に気付いている者もいれば、気付いていない者もいる。

どちらにせよ、その者たちが力を行使し暴走したら、手が付けられなくなってしまうだろう？

そういう者たちの暴走を止め、一般人に能力の事を知られないようにする事。

それが俺の役目であり、俺が所属している機関の目的だ」

言いたい事は分かった。

だが高崎の事、そのバックにある機関の事　　。
謎が多すぎる。

信じられるわけがない。

だが　　。

「……引き受けるのを拒否したら？」

「お前の精神は悪化するだけだ。何しろ、覚醒した能力が大きすぎる。能力者にも力の差が色々あるが、お前ほどの力は類をみないな」

「その依頼とやはらは：危険なものなのか？」

「能力の力量にもよるが：まあ危険には違いがない」

そう言い放って高崎は煙草を吸い殻入れに火をもみ消し捨てる。

危険な依頼など、出来れば協力したくない。

高崎は詳しくは言っていないが、様々な能力を持った者と戦うことになるのだろう。

「生憎俺の能力は今現在は人の能力の痕跡を読むことしか出来ないからね。」

それだけ出来れば充分な気がするが。

「そんな事言ったら俺だって死の記憶を視ることしか出来ねえだろ」

「いや、漸。君の能力はね　　一番恐ろしいところはさ、死をもたらず根源さえも視えてしまう事なんだよ」

「死をもたらず、根源？」

「要はさ、能力っていうのは軀の何処かがエネルギー発生源になってて、そこから全身に作用する事で能力を使えるんだ。」

つまりそのエネルギーの根源を封印してしまえば…」

「能力も封印してしまえる、という事か？」

「そういう事だ。まあ根源を視るにはもつと修業が必要みたいだけど」

そう言つて高崎は立ち上がり漸の前に立った。

「で、どうするの？」

その視痕の能力を活かすか、精神ごと朽ち果てるか」

「どっちにしろ、選択肢なんてあつてないようなもんじゃねえか」

そう。こうなつてしまった以上、もう覚悟を決めなければならない。
漸は高崎の目を見ると、口を開き言つた。

「俺は、お前に協力する。俺の能力が必要だと言つのなら、好きに
使え」

高崎の口元の笑みが、気のせいか深まつたような気がした。

「…で？俺が死痕を視てもぶつ倒れないようにしてくれんだろ？」

「勿論。依頼の度にぶつ倒れられちゃ俺もたまつたもんじゃないからね。」

一体どうしてくれるというのだろうか。

高崎は漸の目をじつと見た。

吸い込まれそうな、深い瞳。

「身体のを抜いて。俺の眼に意識を集中させるんだ」

漸は言われた通りに高崎の眼に意識を集中させた。

このまま、時間がいつまでも経つてしまいそうで。

ふいに、高崎の緑色の眼に何かが浮かんだ。
金色の、糸のような、入り乱れ舞う光。

「
” 灰から灰へ ”」

高崎の放ったその言葉が、やけに響いて聞こえたような気がした。

その言葉に反応するように、高崎の瞳の中にあつた金糸が、漸の眼の中へと入っていく。

それは、今まで体験した事のないような、不思議な感覚だった。
ただ不思議なことに、違和感は何も感じない。

視界に何とも表し切れぬ美しい輝きが舞いながら満ちていくのが分かった。

暫くするとその光は次第に消えていき。

漸の視界は元に戻った。

「
もういいな。漸、終わったよ」

「
今のは……？」

「
まあ要は君がぶっ倒れないようにするおまじないってことさ。」

「
……へえ」

高崎の適当な説明ではよく分からなかったが、要は今の金糸が俺の中で枷として働いている　　そういう事なのだろう。

「
じゃあ等価交換って事で、早速君には仕事をしてもらおうか」

「
……わかった」俺が素直にそう返事すると高崎は嬉しそうに微笑んだ。

何故この男は、こんなにも俺にものを言うときに楽しそうな表情をするのだろう。

「…で、仕事って？早速”能力者”とやらと戦わされるのか？」

「まあその通りだね」

そう言って高崎は物が山ほど散在している机の上からA4サイズの髪を三枚ほど取り出し漸に手渡した。

「履歴書…？」

「そう。見てのとおりそれはある共通点のある人物たちの履歴書だよ。さて、彼らの共通点は何かな？」

俺は履歴書を三枚目の前にあるガラス机の上に並べた。

考えるまでもない。彼らの共通点は。

「…この大学で、ここ最近自殺した生徒……」

「ご名答。」

名前を見ただけで分かる。いや、むしろこの大学内で分からない者などいないだろう。皆表立って口には出さないが、この一連の自殺事件は生徒たちの心に少なからず陰を映し出しているのだから。

「この三人が、どうしたっていうんだ？…一応、警察が調べて自殺だって分かったんだろ？」

「確かに自殺には違いないんだ。結果的に手を下したのは彼ら自身だからな。」

でも、もしそう操作した者がいたとしたら？

直接手を下さずに、自殺させる能力を持った者がいたとしたら…？」

高崎の言葉が、脳内でやけに響いて聞こえた気がした。

「直接手を下さずに、人を自殺に追い込める…？」

漸は高崎の放った言葉を復唱した。

そんな事人間が出来るのか。まるで、人間を操り人形か何かのように…

そこまで考えて漸ははっと思い浮かんだ。

「……そうか…」催眠”…！」

「大正解」

高崎はそう言っ指をならす。

「ここにいる三人はどの子も調べてみると、少なからず悩みを抱えていた。だが自殺しようとしてまでには至らなかったんだ。ところが何者かがその悩みを増幅させ、自殺に至らしめた」

「…何で”催眠”みたいなもんだって分かったんだ？もしかしたら、本当に自分自身で死にたくなって死んだかもしれないだろ？」

漸がそう言つと高崎は自らの左目を人差し指で示して見せた。

「言っただろう？俺は能力を行使した跡 所謂指紋みたいなものが視えるって」

そういえばそんな事を言っていたか。

「三人の死体それぞれを見たが、どの死体にも能力の跡がついていた。

…まあ、詳しい能力は分からないけど。視えたのは三人とも共通で”外部から何らかの信号を脳に与えた”。つまり、催眠状態にかかった…ってとこかなーって今の時点では考えられる…かな」

「何だ。自信持って”能力の跡が視える”なんて言っておいて随分適当じゃねえか」

「俺が視えるのはあくまで外観だけだよ。だから俺一人で学校も含めこの辺一体の能力者を制御するのは大変だから、いい能力を持った漸に援助を頼んだんじゃないか」

先程までの自信満々の態度はどこへ行ったのか、高崎はそう言う人差し指で机に円をくるくると描きはじめる。

漸はその様子を片目に履歴書を三枚に手に取って見た。

特に三人とも変わった経歴はない。普通に高校まで出て、この大学に入った者ばかりだ。

「…この経歴じゃ何にもわかんなさそうだな。犯人を割り出すにしてもどう調査していったらいいんだ？」

「それは君次第だよ、漸」

「はっ…！？そこまで丸投げすんのか！？」

「頑張ってくれ給え漸。君の働きで人が救われるか救われないかが決まるんだからね」

「…！！」

もはや言葉に出来ない。

犯人がこの大学にいるかどうかも分からないのに、いや仮に犯人がこの大学内の人間だと絞り込めたとしても、生徒だけでも一学年軽く千人以上だ。それが全四学年、教授、ましてや清掃員、事務員まで加えたら頭がくらくらするほどの人数だ。

というより、ぱっと見て誰が能力者かも分からないのに犯人など割り出せるのだろうか。

「……まさか一人でやれってんじゃないだろうな？」

「まさか。俺も資料集めくらいは暇なとき手伝う…かも」

「…かも」！？しかも資料集めだけ！？

漸が耐え切れずソファから立ち上がると高崎ははいはい、とでも言いたげに手のひらをひらひらさせた。

「分かった分かった。四宮くんだけならいいよ。四宮くんにごっそそ隠しても漸関係の事だと意地で知ろうとするだろうし。それに

…」

そこまで話して高崎は口をつぐんだ。

「…何だよ？」

「いや、何でもなし。この先は今話すのはあまり得策じゃないからな。それより四宮くんには能力の事は話さないでおけ。」

「能力の事話さないでどうやって捜査一緒にやれっていうんだよ！？」

「まあそこは漸に任せるよ」

そう言つて高崎は立ち上がり時計を見た。

「今日は授業は？」

「…三時限目の倫理学だけ」

「じゃあ出席とらないね？四宮くんも同じ授業かい？」

「ああ」

漸がそう気のない返事をする和高崎が財布を取り出しその中から紙切れを二枚取り出した。

「これ何だよ？」

「うちの大学の最寄り駅から二駅上り方面にある坂間駅前の喫茶店の特別優待券。ケーキと珈琲のセットがタダになるから四宮くんで行つてきな」

漸は渋々その券を受け取る。高崎がいい事をするとか嫌なことが待ち受けていそうで、漸は何だか嫌な感じがした。

とはいえ、よくよく見ればこの喫茶店は玲が以前から行きたいと言つていた場所である。

調査を助けてほしいと話したいと言つのもあるし、たまにはこういう場所にいくのもいいかもしれない。

「じゃあ、誘つて今日行つてみるよ」

「おう。きつと楽しいぞ」

高崎の自室を出、桔梗棟を出ると漸は棘薔薇棟の前に位置する薔薇庭園へと向かった。時間は9時45分。1時限目の途中といったところか。

薔薇庭園は名前の如く薔薇の木が生い茂る、お伽話に出てきそうな庭園で、いつもは昼休みなど生徒達で溢れかえっているが、今の時間帯は皆授業があるせいかな誰もいない。

漸は近くにある適当なベンチに座ると、携帯を取り出し玲に電話をかけた。

暫く呼び出し音が鳴り、やがてボタンを押した音と共に玲の眠そうな声が聞こえてきた。

『ゼーン……』

「玲。今起きたのか？」

『んー。…もう今日は大学行く気しなかったからね…。昨日は大丈夫だったかい？』

「俺は大丈夫だ。玲は？先帰ったって高崎から聞いたけど」

『大丈夫…。僕の顔があんまり酷かったんでママからえらく心配されたけど。でも…漸が無事なら良かったあ……』

相変わらず色男台無しの態度である。が、玲のいつもと同じ態度に漸は安心した。

「あのさ。話したいことがあるんだけど…」

『えっ！！？そ、そんないきなり……』

「何想像してんだ。とにかく今から坂間駅まで来れるか？」

『坂間駅だね！？分かった！ええと…一時間！一時間で行くよ！』

「一時間か。分かった。じゃあ後でな」

そう言い漸は電話を切った。ここから坂間駅はだいたい20分くらいだ。

今から坂間駅に行けば少し早く着きすぎてしまう。

そこで漸は先程高崎から渡された、自殺した三人の履歴書を取り出し眺めた。

一番上に重ねてあったのが伊藤彩乃。証明写真には髪を少し茶色く

染めた、シヨートカットの利発そうな女が写っていた。

「幼稚園から高校まで聖アリア女学院か」

「聖アリア女学院は別名”超お嬢様学院”と言われるほど、金持ちの、しかも頭脳明晰の者しか入れないとされている学院である。

殆どの者がそのまま聖アリア女学院大学までエスカレーターで進学すると聞いたが、伊藤彩乃はどうやら違ったようだ。

「にしても、何でうちの大学なんだろうな」

法学部なら聖アリアにもあっただろうに。

「…そして、この伊藤彩乃が屋上から首を吊って死んだんだな」

漸は昨日の朝の事を思い出す。恐らく、あの時見た死痕は伊藤彩乃のものだ。

不思議な感覚だった。まるで、他の事など忘却してしまったかのように、死ぬことしか考えられなかった。

「…そういえば松井隆盛の死痕を見た時も」

漸は重ねてあった次の履歴書を見た。少し日に焼けた、金髪の男がそこに写っていた。

「…こいつの死痕を見た時も、死ぬこと以外考えられなかった。」

催眠にかけられるというのはああいう事なのか。それとも自ら命を断つという行為自体が既にそういうものなのか。

いずれにせよあまりいい気はしなかった。

「…こいつは高校までは普通の公立高校だったのか。そして最後の自殺者…」

漸は一番下にあった履歴書を見た。

渚由佳里。会ったことはないが、学部は漸と同じである。学部が同じでも学科が違つと授業形態も全く違つたため、他学科の生徒の事は知る良もなかった。

証明写真にはポニーテールの真面目そうな女がいた。

「中学までは地元の公立で、高校は私立藤星二高。この履歴書を見るかぎりだと、三人の共通点は何もないな」

漸はふう、とため息をつく。履歴書を自分が座っている横へ置いた。

「調査しろつつつてもなあ…普通に考えたら、まずはこの三人の共通点を捜す事だよな…。あとは、まだ視てない渚由佳里の死痕も…」

数え上げたらきりが無い。

漸はふうとため息をつき空を見上げた。

この季節にしては珍しく、遠く澄み渡った空。

吹く風は少し涼しくて、暑さが辛いこの気温でも心地よさすら感じる。

ふいに、風がさらっていくかのように隣においておいた履歴書が舞い上がった。

漸は拾おうと、紙束を追いつける。

「……………あ」

漸の手が落ちた紙束に届く前に、白くしなやかな手が紙を拾い上げた。

「……………これ、貴方の？」

漸はその指先から上へと、視線を移していった。

長く黒い髪が、美しく風になびいている。

白いシフォンワンピースが、妙に映えていた。

漸は彼女の顔を見た。

白い肌に黒い大きな瞳は、どこか人形を彷彿とさせる。恐らく同学年か一つ上くらいだろう。

「……………？」

彼女は返事をしない漸を見て困ったような表情をし、微笑んだ。美人ではあるのだが、儚げな、今にも折れてしまいそうな、弱々しい印象を受けた。

「…これ、履歴書？」

「あつ…いや、それは…！」

自殺した人間三人の履歴書なのだ。

そんなものを持っていると知られたら当然怪しまれるだろう。

漸は女の手から履歴書を取ろうと手を伸ばした。

女の手と漸の手が少し触れ合う。

その瞬間。

「……………っ！」

漸の頭に、ちくりとした痛みが走った。

一瞬、世界がぐにやりと歪む。

この感覚。

これは、どこかで。

言い様の無い違和感。

漸はそれを振り払うかのように、目の前にいる女から履歴書を取った。

「大切なもののなのね。」

「……………まあな」

漸はそう答えると履歴書を鞆にしまい込んだ。

「今日授業はないの？」

女は手に持っていた教科書とおぼしきものを抱え直して言った。

「あるんだけど…まあサボりつてやつかな」

「ふふ、そう」

女はくすりと笑うと漸の目を真っ直ぐ見た。

こうして改めて見ると随分黒い目だ。そう、まるで
闇のよう。

漸は暫く、動けずにいた。

周りの景色が全て消失してしまったかのように、彼女の目の吸い込まれそうな闇に心奪われていた。

そのまま、暫く静寂が続いた。

静寂をかき消したのは彼女の、柔らかい微笑み。

「あら、ちよつと長居しすぎちゃったかしら」

そう言つて彼女は時計を見た。

「それではご機嫌よう、佐々木漸くん。」

「ああ」

彼女の去つていく後ろ姿を見ながら、漸の脳内に過つたものは、何故か枯れて最後の花弁を落とす一輪の花の姿だった。

7:「SIDE R」/巻

漸が坂間駅に来たのは待ち合わせ時間から8分過ぎた頃だった。

玲は改札口からいつもどおりにクールに出てくる漸を見て、内心少しイライラするやら安心するやらで悶々としていた。

安心したのは、昨日死体を　あれは先日大学で起こった自殺を模した”偽物”だと高崎が言っていたが　見た後ガクリと膝をついて意識を失ってしまった漸が、いつもと変わらぬ姿で現れたから。

結局あの後高崎と玲とで高崎の部屋に運んだが、漸の意識が戻らないまま、玲は高崎に『任せておいて』と言われるまま帰ってしまったのだ。いつ意識が戻るかも分からなかったというのもあるし、何より玲自身も偽物だったとしても死体を見てしまったことで

というか偽物だと聞かされても本物にしか思えなかった　かなり
のショックを受けていた。

家に帰ると母が、

『玲！貴方何て顔をしてるの！真つ青よ』

なんて叫んでいたが、玲は『うん…』と返事するだけで精一杯だった。

そして部屋に戻ると玲は儚としたまま服を脱ぎ、そのままベッドに倒れこみ寝てしまったのだった。

一回目覚ましが鳴った音で目を覚ましたが、どうせ今日の授業は出席とらないしサボってしまえーと見事に二度寝を果たしたのだった。それが何と、あの漸の、メールをしても数時間は帰ってこない、電話をしてもほぼ確実に出ないあの漸からのモーニングコールで目覚められたのだ。

しかも寝起き早々デートのお誘いである。

憂鬱な気持ちも一発で吹っ飛び、玲は急いでシャワーを浴び、いつもよりも服装に気合いをいれて（香水も勝負日しかつけないものを

つけてきてしまった)、さあ完璧だと坂間駅までやってきたのだ。
ところが、その漸が10時を過ぎてもなかなか来ない。
このあたりから玲は苛立ちはじめていた。

でもまあ……。

玲はこちらに気付き歩いてくる漸を見て思う。

臙脂色の七分丈のTシャツに、金具やジッパーが沢山　かつ嫌味
がない程度についている黒のパンツにハードなベルト、そしてブー
ツという服装が漸の深緋色の髪によく似合っていて、格好良く決ま
っている。

こうして漸から僕をデートに誘ってくれたのは初めてだしね。

「悪い。少し遅れたか」

そう言いつつも漸は悪怯れた態度は微塵も見せず、いつもどおりの
ポーカーフェイスのままである。

それでも玲の心に苛立ちはもう残っていなかった。

「いいんだよ。今日は漸が誘ってくれた初デートだからね」

玲がそう言くと漸は少し顔をしかめた。

「……デートって何だ」

「いいじゃないか。こうして二人でわざわざ待ち合わせして会っ
てるんだから立派なデートだよ」

「……帰るぞ」

「何言ってるんだい自分で誘っておいて」

「……………」

漸は玲を大きく切れ長な目でじろりと睨んだ。

漸よりも玲のほうが十センチ以上は背が高いので実際のところ漸は
玲を見上げている形となる。

上目遣いで怒ってきても怖くないんだよね。むしろ少し可愛
いというか…

内心玲はそう思っていたがそんな事漸に言われたら殺されるだろう。
玲は話を元に戻すことにした。

「まあまあ、今日はせっかく誘ってくれたんだし、どっか連れてつ
てくれる気だったんだらう？」

漸は暫く玲を睨んだままだったがやがてため息をついてポケットに
手をつっ込んだ。

「…ああ。」

漸はぶつきらばつにそう言つと、大通り沿いに歩き始めた。玲もそ
れに続く。

だいたい1分くらい歩き始めたあたりで、漸は今歩いている大通り
から一本、細々とちよつとした傾斜になっている横路に入る。

「…確かこつちだ」

漸はきよろきよろしながら進んでいった。

あ、あれ！？こ、この道はまさか……………！

玲の脈拍が徐々に高くなる。

いやでもまさか、一回だけしか言つてないし…

玲の胸の高鳴りを知る良もなく、漸は歩いていく。

やがて、漸はお洒落な、日本家屋風の店の前で立ち止まった。

「ええと…………」時雨屋”だから多分ここだな」

わ、わあああ！！！！ゆ、夢じゃないよねこれ！？

そう。ここは玲がかねがね行きたいと思っていた喫茶店”時雨屋”であつた。

知る人ぞ知る隠れた名店で、和の粹を柱としておきつつも、尚且つ洋のテイストも織り交ぜた良い意味で和洋折衷なスイーツが話題の老舗店である。

それだけに値段もかなりいいのだが……

「お前、ちょっと前にここ来たいって行つてたよな。」

「あ、ああ」

「じゃあ入ろうか」

まさか。漸が連れてきてくれるとは……

いつかは来ようと思つていたが、まさかこんな形で来れるとは。感動して声を出すことすらままならなかった。

店のなかに入ると着物を来た女店員が「いらっしゃいませ」と近づいてきた。

「二名様でいらっしゃいますか？」

「はい。それであの……これ」

そう言つて漸が取り出したのは時雨屋の特別優待券だった。

ケーキとコーヒー（または抹茶）がセットでタダになるという代物で、一般人には手に入らないようになっている。

確かこの券を貰えるのは店の関係者と株主、くらいだったはずだが

……

券を漸が見せると女店員はにこりと微笑んだ。

「はい。確かに　あら？」

女店員は券を見て驚いた顔をし、二人に向き直つた。

「失礼ですが　渚由佳里さんとか学友か何かですか？」

渚由佳里……？

どこかで聞いたような名前な気がする。

漸のほうをみると、かすかに目を見開いていた。

「……渚さんの事をご存知で？」

漸が女店員に聞くと女店員はこくりと頷いた。

「ええ……まあ立ち話も何ですしお部屋へどうぞ」

そう言っただけで歩きだす女店員に漸と玲はついていった。

時雨屋は個室になっており、全部で12部屋ある。

二人が通されたのは、一番奥　つまり一番高級な、いわゆる俗な言い方をするならばVIP部屋だった。

部屋はだいたい四畳半くらいだろうか。まず通されたとき、畳のいい匂いが漂ってきた。部屋自体は質素だがそれがまた美しく、窓からはまるで平安時代から抜き出してきたのかと思うほど美しい日本庭園が見える。

玲と漸は互いに掘りコタツ式の机を挟んで向かい合うように座った。

「　渚さんの事ですけれど」

女店員　名札を見るかぎり田沼さんというらしい　はお冷

やをもつてくると、机の横にそつと正座をし話しはじめた。

「先程お見せいただいた券は、ご存知でしょうかがこの店で働く者のみが貰える優待券です。ぱつと見た感じでは分からないのですが、店の者にだけ分かるようにその者の印がしてあります。」

成る程。つまりあの漸が差し出した券に、分からないように”渚”とでも判子のようなものが押してあったって事かな。

でも何故　と玲は脳内で首をかしげた。

何故漸が、その渚さんとやらの券を持っているんだろう？というより、渚さんって誰だっけ？どこかで聞いたことあるような気がする

んだけど……

「では渚さんはこちらの喫茶店で働いていたんですね」

「ええ…アルバイトをしてもらっていました」

真面目で明るくて、いい子だったのに あんな風に自ら命を絶つてしまうなんて」

思い出した。

渚由佳里。甲南大学三人目の自殺者。確か プールで溺死。

同じ学部で同じ学年なのに、授業なんか一緒に受けたことなくて顔見たことすらないから忘れてた。

「ところで、この券を持っているという事は、渚さんのご学友？」
まさか。漸は言っただけで、渚由佳里と知り合いだったのか？

「いいえ。この券は知り合いから譲り受けたものです。顔が広いから、きつと渚さんとも知り合いだったのでしょうか」
一体誰から譲り受けたんだろうか。

「そうですよ。」

そう呟くと女店員は黙って下を向いてしまった。しばらくすると、
「お品書きをお持ちしますね」と去っていった。

斯くして、部屋に二人きりとなる。

「漸、どういふことだい」

玲は水が入ったガラスを両手で何となく触りながら言った。
ガラスが掌の熱を吸い上げていく。

「どうもこうもないよ。俺は高崎からあの券を買ったんだ。」

「…知り合いつて、高崎の事だったのか」

「ああ」

この券を俺に渡したって事はこうなるのも高崎は承知だったんだろ
うな、と漸は付け加える。

「えっ！で、でも僕を誘ってくれたのはなんか理由があるんだよね
！？」

玲は妙に声色を高くして言った。先程の女店員がメニューを置いて
いったが、そんなことを気にしている場合ではなかった。

漸は不思議そうしながら水を飲んで玲を見た。

「何だよ、何でそんなムキになってんだよ。」

…別にたまたま高崎に券貰ったから暇潰しにつて玲を誘ったわけじ
やねーよ。まあこの店だったのはたまたまだけどさ。」

「じゃあ僕が駄目なら亜佐奈でもいいや…とかじゃないんだね？」
んなわけないだろ、と漸はメニューを開きながら言う。

「お前じゃなきゃ駄目なんだよ。今日の用事は」

その言葉を聞いて玲の心は一気に天へと舞い上がらんばかりの勢い
で幸福に満ち溢れた。

「漸っ！！やっぱ僕を将来の伴侶として…」

「んなわけないだろ。」

というかそういう以前の問題か、と漸は呟く。

それから漸と玲は適当にケーキと珈琲を頼み、女店員を呼んだ。女
店員は「かしこまりました」と言うのと去っていく。

また二人きりとなったところで、漸が話を切り出した。

「実は今日玲を呼び出したのはな」

そう言つて鞆から取り出したのは三枚の紙だった。

「これ…」

「そう。履歴書だ。よく見てみる」

漸は玲側に履歴書を向ける。

玲はそれを注意深く見た。

それぞれの紙に写る三人の顔。見覚えのある名前。

「これ　　自殺した三人だね」

「そうだ。伊藤彩乃、松井隆盛、そして渚由佳里。この三人は最近起きてる不可思議な自殺事件の被害者」

被害者…？

言葉に違和感を感じて玲は漸に向き直った。

「だって、まあ確かに被害者だけど、結局は自分で死んだんだから被害者っていうのは可笑しいんじゃないかい？」

「そう思うだろ？けどな、高崎の見解だとそうじゃないんだ。」
漸はそう言って履歴書を覗き込む。

「この三人は揃って私生活に悩みは抱えていた。けどそれは自殺する程の事じゃなかったらしい。内容は全く聞いてないけどな。で、高崎の話だと　　」

そこまで言って漸は口をつぐんだ。

何かを、物事を深く考えているように玲には見えた。

やがて漸は水を一口飲むと、会話を再開させた。

「でだ、高崎の話だと、どうやら誰かがその悩みを増大させて、結果自殺に至らせた。勝手に死んだのは奴らだが、死なせたのは誰か別の人物」

「え…なんで」

そんな事が分かるのか。

確かに三人続けて短期間に自殺はおかしい。けれど警察の調べでは怪しい人物はいなかったという事だ。

「確かに、おかしいと思うだろ。彼らは本当に、自分の意志で死んだかもしれない。けどな　　」

「高崎は、”何者かが自殺に追い込んだとされる証拠”をもしかして知っている　　とかかい？」

玲がそう言つと漸は大きく目を見開いて玲を見た。
そこでちょうど頼んだケーキと珈琲がくる。

持ってきたのは先程の女店員だ。頼んだものを置いていくと丁寧な身のこなしで去っていった。

「僕の二番目の兄貴は刑事だからね。これくらいの推理力はあるさ」
「…お前、意外と兄弟多いんだな」

とにかく、と漸は続ける。

「俺もまだ、」三人の自殺した人間がいて、そいつらが恐らく何者かに後押しされて死んだと思われる”って事しか知らない。

今回俺が高崎に頼まれたのは、この”後押しした誰か”を捜し当てることだ」

「何で、漸が？」

玲は頼んだモンブランを頬張りながら聞く。

漸は最初言いくそうにしていたが、やがて口を開いた。

「それは…高崎に借りが出来たからな」

まさか。漸が高崎に借りを作るなんて。

「成績でも上げてもらったのかい？」

「ちげえよ」

漸は珈琲を飲みながら言う。

「とにかく。俺だけじゃきついから誰かに助けを求めていいかって聞いたらおまえならいいって。

だからって訳じゃねえけど…嫌だったら仕方がないが、こんだけ適当に言っておいて頼むのは角違いかもしれないけど……」

そこまで言って漸は言いくそうに下を向いた。

玲はため息をついた。そして漸を見て微笑む。

「この僕が、君からの誘いを断るわけないだろ。

いいよ。犯人捜し、一緒にやろう」

7・5：思想境域「／想刻」

霄。
そら

吸い込まれてしまうのではないかと思う程に奇麗で、手を伸ばせば届きそうなのに、果てしなく遠い。

目蓋を閉じ、己の右眼に触れる。

この眼は視るモノの心を捉えるのに、鏡に映して己を視ようと己の心は捉われない。

頭上に広がる（無限）のセカイに向かい、消え入りそうな声で音を奏でた。

この声は聴くモノの心を操るのに、自らの声を聴こうとも己は決して操れない。

ただ

穴の空いた心に残るのは
虚無の痕跡

己自身を捉える事が叶わないのなら

己自身を操る事が叶わないのなら

己以外のモノを
。

8:「SIDE R」/式

「それで…犯人捜しをどうやって始めたらいいかなんだが…」

漸はケーキ　予想外にも彼が頼んだものは『苺のショートケーキ抹茶風味』だ　を頬張りながら言った。

玲はうーん、と少し考えると履歴書を見る。

三人とも普通の経歴の持ち主で、一見すると関連性は何も見当たらない。

玲がそのことを漸に言うと、漸もそう思ったらしくこくりと頷いた。
「だからまずは、伊藤、松井、渚の関連性を見いだす為にも三人の家族構成、友達付き合い、人物像、悩みは何だったかとか……最終的には時間割まで手当たり次第捜すべきだと俺は思う」

「僕も同感だね。それから……」

玲は頭の中の記憶を廻らせた。

健兄^{たけ}さんは事件の時、いつもどんな風に捜査してるって言うてたかな。

健は玲の二番目の兄で現在刑事として働いている。

仕事柄なかなか家には帰ってこないが、以前確かにどんな風に捜査を進めるか話していた気がする。

「　自殺現場をよく調べる、とかは？」

何も思い出せず玲がそう言うと、漸は何か悩んでいるように下を向いた。

「漸？どうしたんだい？」

「いや……」

確かに現場を見ることこそ大切だ、と漸は言った。

だがそう言った漸は、眉間に皺を寄せて明らかに何か心に思うところがありそうである。

やっぱり…

玲は漸のそんな顔を見ながら思う。

先程から薄々は感じていたが、恐らく漸は自分にまだ隠していることがある。

入学当初からの付き合いだ。漸が今少なくとも、何かを心に秘めている事くらいは解る。

だからと言って、無理に聞き出そうなんか思わないけど。

信じているから聞かない。

漸が高崎に借りを作つた理由は知らないが、恐らく何かあるのは間違いないだろう。

けれど、それは自分が詮索する事じゃない。

僕も弱いねえ。

玲はふいにそう感じたため息をついた。

事件を突き止めるなら全部識っておいたほうがいいだろうに。

「……なあ玲」

玲が儚とそんな事を考えていると、ケーキを食べおわりコーヒを飲んでいた漸がふいに呟くように言った。

「人を殺すって、どういう事だろうな」

突拍子もない　というほどでもないが、あまりに突然の質問に玲はつい「えっ」と言い返してしまった。

そんな玲の反応を知ってか知らずか、漸は言葉を続ける。

「だってさ、普通なら人を殺すなんて発想には至らないかなって思うんだ。」

この世界では、人を殺したら法に裁かれるだろう。だったら自分が被害を被るんだから、殺さないほうが得策だと思うんだけどな」

「それは…」

気が付けば玲は言葉を発していた。

「それは、理性が吹っ飛ぶくらい、その人の事が許せなくて、存在する事すら許せなくなるからじゃないかな　殺人の善し悪しが分からなくなるくらいに」

漸はかすかに目を見開いて玲を見た。

「理性が、無くなる位」

「そう。だって普通はそうやって”殺したら刑務所に入れられる”とか”周りからの目が冷たくなる”とか…いわゆる”理性”が働くだろ。けれど実際に殺人を犯してしまった人は少なからずいるわけだ」

「でもそう考えると、今回の犯人は理性がギリギリで働いてんのかな」

漸はかすかに口元を緩めながら言った。

「なんで？だって人を殺してるじゃないか。間接的だけど」

「けどさ、本当に理性なんかぶっ飛んじまったら、こんな風に”間接的に”なんて回りくどい殺人しないだろ？」

人を三人も殺すなんて非理性的な事をおきながらばれないように直接手を下さないなんて矛盾しすぎだろ、と漸は微かに嘲いながら言った。

玲と漸が暫くそうして話していると、先程の女店員が二人が食べ終わったのを見計らって食器を下げに来た。

「あ…どうも」

漸が相変わらず淡々とした声でそう言うのと女店員はにこりとして漸と玲のグラスに水を注ぐ。

「何か御用があればお申し付け下さい」

そう言つて女店員は去っていく。

漸はその後ろ姿を見ながら言った。

「一応、ここは渚のバイト先だったな」

「そうだね。つて事はさっきの店員さんにも話を聞くべきかもね」

そこで二人は去った直後で申し訳ないと思いながらも先程の女店員をもう一度呼んだ。

「すみません。先程来てもらったばかりなのに」

「いいんですよ。渚さんの所縁の方ですもの」

そう言つて女店員　田沼さんはにこりと微笑んだ。

年はだいたい三十代前半といったところか。着物のせいかもしれないが、落ち着いた雰囲気がまたこの店に合っており心地好い。

古き良き女性、というのはこんな感じの人なのだろう　と玲は感じた。

「実はお聞きしたい事があって」

漸は話を続けた。

「渚さんの事です。今このような事を聞くのは酷かもしれませんが、生前悩みなどあるとか田沼さんに話してませんでしたか？」

田沼さんは暫く考えていたがやがて顔をあげて答えた。

「特には…。学校がなかなか忙しくて大変だと言っていたくらいですわ。」

「具体的には聞いていませんか？学校の何が大変かとか」

「そうですね…確か研究室が大変だと言っていましたかしら。そこから先は具体的には聞いていないのですが…」

そう言つて田沼は悲しそうに下を向いた。やはり渚に生前よほど思

い入れがあつたのだろう。

少し胸がチクリと痛むのを感じながら玲は口を開く。

「渚さんの生前使っていた所縁の物とかは……」

「ありますわ。あの子が使っていたロッカーがあります。遺族の方が来たら渡そうと思っていたのですが、ご自宅との連絡がつかなくて。」

御覧になります？と田沼が言ったので、二人はさっそく見に行くことにした。

時雨屋のスタッフルームは店の奥にあり、そこから直にロッカールームへと繋がっている。

田沼に案内され二人が行ってみると、意外にもこちらは事務的な、すっきりとした造りになっていた。

「渚さんは週何回ほどこちらでバイトを？」

玲の質問に田沼は少し振り返り言う。

「だいたい三、四回は入ってくれていましたわ。」

「こちらでの人間関係は？」

今度は漸が質問する。

「良好でしたわ。みんなに好かれる、優しい真面目な子でしたのよ……あ、こちらが渚さんのロッカーですわ」

それは、だいたい20個くらいのロッカーが規則的に並んでいるうちの一つであった。

一見何の変哲もないロッカー。玲の目線の高さに丁度『渚由佳里』と名前の書かれた紙が貼ってある。

「これが……」

「はい。渚さんが使用していたロッカーです。」

漸は扉に触れた。

「中の荷物は見ましたか？」

すると田沼は何も言わず首を縦に振った。

「一度だけ。でももういいんです。そんなに何回も見たら……私

……」

そう言つて田沼は目頭を押さえ、すみません、と言つた。

やっぱり、辛いよな……

玲は田沼の悲しそうな姿を見てそう感じた。

田沼はロッカーの鍵を漸に手渡し、見終わり鍵を掛けたら返すようにと伝え去つていった。

「いいのかね、僕たち二人で自由に見ちゃって」

田沼の立ち去る背中が見えなくなつてから玲はぼそりと言つた。

漸は鍵穴に鍵を入れ回しながら言う。

「いいんだろ。渚由佳里の私物を見るのは辛いだろうし、持つていかれてまずいものは入っていないんだろう。少なくとも、田沼さん的にはな」

カチリと鍵が開く音が響く。漸は鍵を抜き、ゆっくりとロッカーの扉を開けた。

「意外とそこまで入つてないな。ボストンバックに仕事着、くらいか」

「取り敢えず、バックでも見てみようか」

そう言い玲はバックを手に取り開けた。

「あれ、持ったとき随分軽いと思つたんだけど、これはまた……」

「手帳と、筆記用具か。まあ財布とか携帯みたいな普段持ち歩くようなもんは遺族が持つてるだろうし」

むしろこれだけ残つてただけでも運が良かったか、と漸は手帳を手にした。

何の変哲もない手帳を適当にパラパラとめくり、六月のページを開く。

「結構書いてあるな」

漸が見て一言そう言つたとおり、バイト、学校……様々なシチュエーションで色分けが綺麗になされており、これを見るだけで渚が几帳

面で真面目な性格だと言うことが見て取れた。

「ええっと…確か渚さんが自殺したのは6月5日の午後3時ごろだったよね。ってことは…」

二人は顔を突き合わせて手帳の6月のページを見る。

玲は日にちを指でなぞっていき、5日の部分で止めた。

「この日は午後6時からバイトが入ってたみたいだね」

淡いピンクのペンで書いてある”時雨屋 18時～22時”の文字。しっかりとした綺麗な文字だった。

「前日には研究室のゼミが入ってたみたいだな」

漸が4日の部分を見て言った。青いペンで綴られた”ゼミ 18時”の文字。

「そつえば…田沼さんがさっき言ってたな。渚が『研究室が大変』って言ってたって」

「確かに言ってたね。他の学科の研究室はよく分かんないけど…僕達は今全然大変じゃないよね」

「まあな。本格的な研究は10月から…って高崎からも言われているし。」

……一応、渚の研究室の事も調べてみる価値はありそうだな。自殺前日だし一番怪しいと言えば怪しいか。」

そう言つて漸は再び手帳に目をやった。

玲はその様子を見ていたが、ふと頭にとある疑問が宿る。

「なあ漸。おかしいと思わないかい？」

漸は玲のその呟きに顔を上げた。

「何が？」

「だってさ、普通昼間の3時ごろに大学のプールで自殺なんかするかな？その前に自殺した二人が何時に自殺したかは分からないけど、確か夜中とか朝方だったような気がするんだ」

漸はそれを聞き確かに、と頷く。

「伊藤彩乃が自殺したのが午前2時ごろ、松井隆盛が自殺したのが午後5時ごろだったな」

「松井の5時ごろっていうのも早すぎるけど…それより渚の昼間の3時は少し異常な気がしないかい？」

漸は一度手帳を閉じ、少し何かを考えている様子だったが、やがて口を開いた。

「……うちの大学のプールは屋内だ。水泳部しか使わないから、基本他の生徒がいるのは朝練の時間である7時から8時半、それから夕方の練習の時間である18時から21時。あとの時間は鍵が閉まっていて関係者以外は入れない。

つまり渚は自力で何とかして開けたのか、誰かに開けてもらったのか……」

「どっちにしろ、今の数少ない情報だけじゃ何も分からないね。今日からでも早速聞き込みをし始めてみようか」

「そうだな。何しろ3人分の情報をたった二人で得るんだからなかなか大変だが…頑張ろうぜ、玲」

そう言って漸は玲の肩を叩いた。

全く、惚れた弱み…ってわけじゃないけどさ。僕はほんとに漸には弱いね。

玲は内心そう思いながらもああ、と頷き少し微笑んでみせた。

それから暫く二人は渚由佳里のロッカーを漁ったが目新しいものは何も出てこなかった。

仕方がないのでポストンバックに入っていた手帳にシャーペン一本を念の為内密に持ち出すことにし、二人はロッカーの鍵を掛けた。

ロッカールームから出、スタッフルームへと行くと、そこには他の店員と茶を飲み休んでいる田沼がいた。

「もう良いんですの？」

そう言い田沼が近付いてくる。玲は持っていた鍵を渡しええ、と言った。

「見せていただいて有難うございます。」

「いえいえ。いいんですのよ。何より」

そう言つて田沼は漸と玲の姿をまじまじと見た。

「同じ大学のせいかしら。貴方達を見ていると、何故か渚さんを見ているような気がしてならないの」

「それで？この後はどうしようか？」

時雨屋を出、二人は駅に向かう大通りに沿い歩いていく。

「先ずは…俺はやっぱり一度渚の自殺現場を見に行きたい。その後学校にいるついでに渚の研究室の事やらなんやらを調べてこようと思つ」

そう言い漸は先程持ってきた手帳を取出し眺めた。

中をペラペラと捲つてみたりなぞつてみたりしている。

その瞬間。

「……………っ！！」

漸がこめかみ辺りを押さえ一瞬だけだが 端正な顔を歪ませた。

「ぜ、漸……………？」

どうしたんだい、と玲は漸の肩に触れた。

あれ……………？

一瞬、何か例えようもない感覚が過つた気がした。

「漸」

「大丈夫だ。少し頭痛がしただけだ」

そう言っていると漸は少しだけ笑ってみせる。

「なら……いいんだけど」

妙な感覚はもう無くなっていた。きっと気のせいだったのだろう。

漸は鞆に手帳をしまった。

「玲はどうする？」

「うん……僕はとりあえず松井と伊藤、それから出来たら渚の過去について調べてみるよ。履歴書を見せてくれるかい？」

「これからも必要だろ。コピーとっておいたからやるよ。ほら」

そう言っただけで玲は履歴書のコピーを手渡す。

「うん、有難う」

気が付けば駅の前にいた。

漸は再び大学へ向かうため下りのホームへ、玲は一番近かった松井の出身高校へいくために上りのホームへ向かうことになる。

「何か分かったらメールするよ」

「おう。じゃあな」

そう言っただけで漸は、珍しく朗らかな笑顔を見せて去っていった。

何だ、ちゃんと笑えるじゃないか。

玲は安心して改札を通って上りのホームへと向かう。

玲が去ったのち、そこには
紅い薔薇の花弁が一枚、風でひらりと舞い上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1110m/>

紅《べに》の痕跡

2010年12月14日15時00分発行